

右京一条五坊の調査

— 第149-5次

1 はじめに

今回の調査は大和信用金庫八木支店の建設に伴うもので、調査地は近鉄大和八木駅南側の藤原京右京一条五坊西北坪と横大路南側溝の想定位置にあたる（図83）。2007年7月に橿原市教育委員会がおこなった試掘調査の結果を受け、遺構の詳細を解明するために実施したものである。調査区は横大路南側溝の確認を主たる目的とし、北側に東西12m×南北9mと、その南に東西4.5m×南北26mの範囲で設定した。また、調査終了直前には南端部を東西にそれぞれ約3m拡張した。調査面積は約260㎡。調査は2007年9月11日に開始し、10月30日に終了した。

横大路は難波から藤原京、さらに東国へとつながる古代の東西幹線道路であった。横大路は現代の道路と重なる部分が多いため、その発掘事例は第64次調査（『藤原概報22』）をはじめ、数例のみである。今回の調査地の周辺では、1992年に橿原考古学研究所が、約75m西において、横大路南側溝を確認している（『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1992年度』）。

2 基本層序

調査区の基本層序は、上から順に、置土（60cm）、暗灰青色粘質土の耕土（60cm）、灰茶色粘質土の床土（20～50cm）、灰褐色砂質土の遺物包含層（10～15cm）、茶褐色粘質土の整地土層（5～25cm）、暗褐色粘質土の地山、となる。古代の遺構は、調査区北側では整地土層の上面で、X-165, 205以南では遺物包含層上面でそれぞれ検出した。



図83 第149-5次調査位置図 1:3000

各土層は南から北に向けて緩やかに下がっており、古代の遺構検出面の標高は、調査区南端で約60.8m、調査区北端で約60.6mである。

3 検出遺構

検出した遺構は大きく3時期に分けられる。第1期（古墳時代まで）は溝と土坑など、第2期（藤原宮期から奈良時代）は横大路とその南側溝や建物など、第3期（平安時代以後）は土坑と素掘小溝からなる。

以下、第2期を中心として、各遺構について個別に述べる。

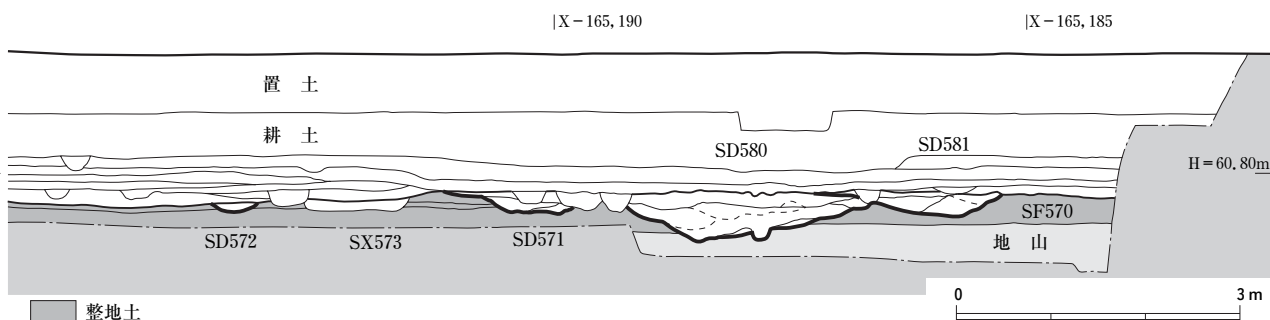


図84 西壁断面図 1:80

横大路SF570 調査区北側において路面の一部を検出した。後述するSD580・SD581を南側溝とする。上部は後世の削平を受けており、路面の詳細は不明である。位置的にみて、第64次調査で検出された横大路SF7220と一致する可能性が高い。

東西溝SD580 調査区北部で検出した東西溝である。最大幅3m、深さ40cmを測り、ほぼ直線状に延びる。横大路南側溝の想定位置にあり、後述するSD581によって北肩を壊されている。

溝の埋土は大きく3層に分かれる。上層は灰褐色の砂質土で、粗砂が多く混じり、人為的な埋め立てによるものであろう。中層は灰褐色シルトと灰褐色砂が堆積しており、水流による堆積層である。下層は灰色の細砂が混じった青灰色粘質土が薄く堆積しており、溝底部の様相を示す。遺物は上・中層に多い。藤原宮期の土器を多く含み、そのほか土馬や墨書土器(釈読不能)、動物骨、少量の瓦、木片なども出土している。

東西溝SD581 SD580の北側で検出した東西溝。上部は後世の削平を受けており、残存する幅は1.5m、深さは20cmにすぎない。重複関係からみて、SD580より新しい。溝埋土は灰褐色の砂または砂質土であり、下部では灰褐色粘質土が混じる。遺物はSD580に比べると少量であるが、藤原宮期の土器に加え、少量ながら奈良時代後半までの土器を含んでいる。

東西溝SD571・SD572 SD580の南側で検出した2条の東西溝。SD571は幅約1m、深さ約15cmを測り、SD580の南肩から1.5m南に位置する。SD572は現況で幅約50cm、深さ10cmを測り、SD571から3.5m南に位置する。

整地土層SX573 SD571とSD572の間にある整地土。暗褐色粘質土に黄灰色粘土が薄く層状に入ったもので、10～15cm幅で波打つ様相を呈す。第64次調査では、横大路南側溝SD7221以南に黄色粘質土と灰褐色砂質土を交互に積んだ厚さ0.2mの整地土SX7225を南北9.4m幅で確認しており、これに対応する可能性がある。

東西溝SD571・SD572と整地土層SX573は、何らかの一連の閉塞施設に伴う可能性があるが、検出長が短く、確定はできない。

建物SB575 調査区南端部で検出した掘立柱建物。規模は南北2間以上、東西3間分を検出しており、南は調査区外へ延びる。軸線は北でわずかに西に振れる。柱掘形

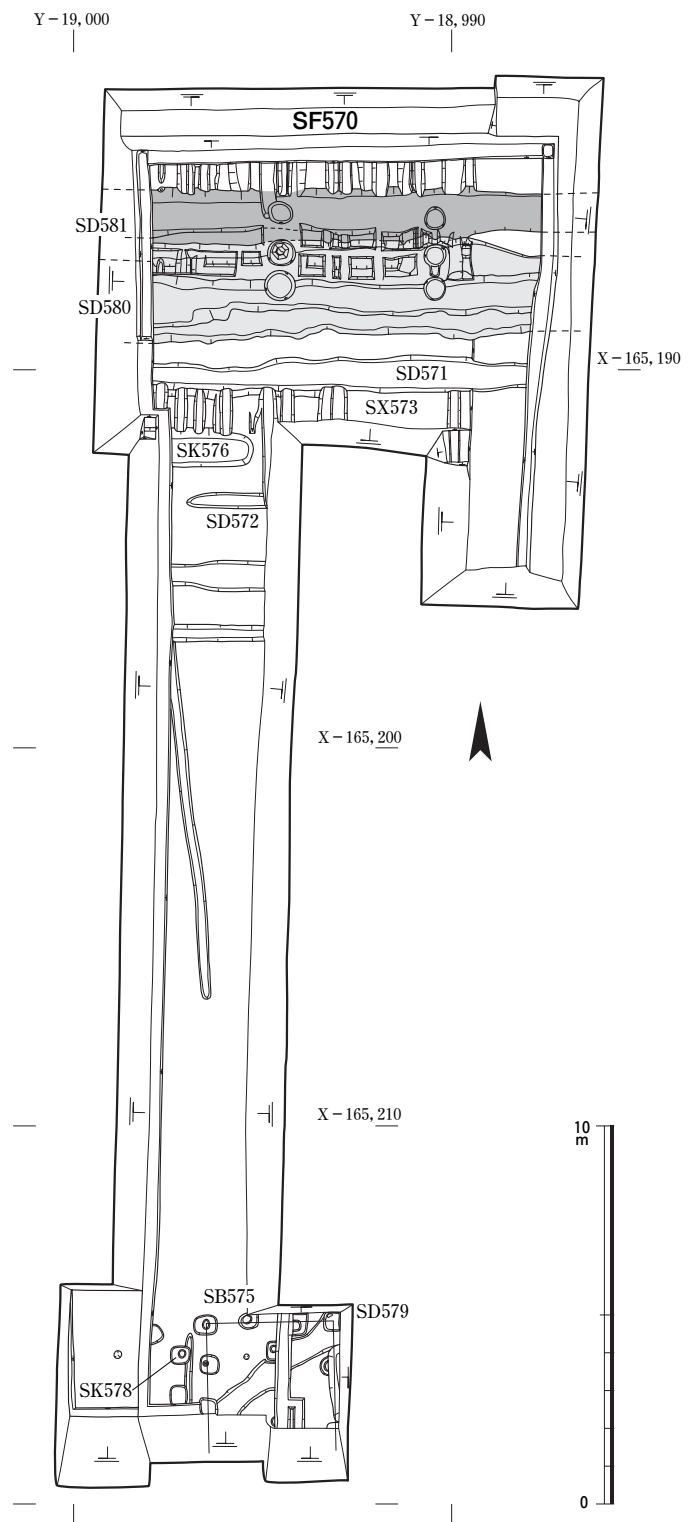


図85 第149-5次調査遺構図 1:200



図86 SD580・581 (西から)

は一辺約60cm、深さ20～60cm。柱間は南北、東西とも1.2mである。時期は柱穴の埋土に含まれる遺物より、藤原宮期と考えられる。東北隅の柱穴と、西北隅より1間南の柱穴には、それぞれ柱根が残る。柱根の断面はいずれも長径約15cmの半円形で、長さ約40～50cmが遺存する。

土坑SK576 東西溝SD572の南で検出した第3期の土坑。隅丸長方形を呈し、現況で南北1m、東西2.5m、深さ10cmを測り、西辺は調査区外へ続く。遺物はごく少量の土器が出土したのみである。

溝SD579 調査区南端で検出した第1期の溝。幅50cm、深さ20cm。検出した部分は直線的で、北で東に約45°振れ、南端では南東方向に曲がる。SB575の柱穴に壊されている。溝埋土は褐色砂質土が混じる青灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。1992年の橿原考古学研究所の調査で確認されたような、方形墓の周溝である可能性もある。

土坑SK578 調査区南端の地山直上で検出した第1期の土坑。径50cmで、石庖丁が出土した。

自然流路SD582 調査区北端の断ち割り調査で検出した南北方向の自然流路。幅は7.3m。深さは40cmまで検出したが、底部には至っていない。埋土の上層は暗茶褐色粘質土で、藤原宮造営に伴う整地の際に埋め立てられたと考えられる。下層は灰白色砂で、遺物は出土しなかった。

(番 光)

4 出土遺物

土 器 土器は整理箱12箱分が出土した。SD580が中心で、SD581や柱穴・包含層からも若干出土している。SD580からは整理箱8箱分の土器が出土した。藤原宮期の土器が大半で、一部藤原宮期以前の土器や弥生土器を含む。墨書土器、円面硯、土馬なども出土している。SD581の土器は整理箱半箱分で、藤原宮期と奈良時代のものを含む。1～8、11はSD580出土である。5は上層出土で、それ以外は中層出土。9・10はSD581出土である。

1～5は須恵器、6～10は土師器、11は弥生土器である。1～3は杯B蓋で、頂部外面はロクロ削りで調整する。1の内面に焼成後の「×」の線刻がある。4・5は杯Bである。4の底部外面は目立った調整痕が確認できない。5はロクロ削り。

6・7は小型の壺Bで、口縁部外面と胴部上半内面をヨコナデする。6は内面に接合痕が見られ、割れ口とも一致している。7は外面の頸部と胴部の間で割れており、接合面の可能性が高い。8は杯Cで、内面には放射一段暗文が施される。底部外面をヘラ削り（b手法）で調整する。9は杯AⅠ、10は皿AⅠで、小片ではあるが、とも

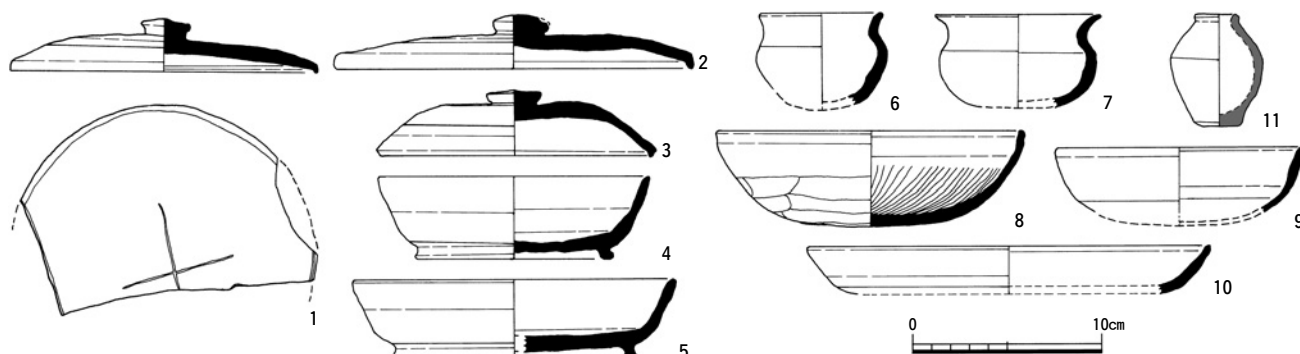


図87 SD580・581出土土器 1：4

に8世紀後半と考えられる。

11は弥生時代の小型壺で、第V様式期と考えられる。

SD580出土の土器は弥生土器や藤原宮期以前のものを若干含んでいるが、藤原宮期を中心とした時期のものと評価することができる。SD581出土の土器は多くはないが、奈良時代後半に相当するものが含まれており、溝の存続年代の一端を示すと考えられる。(丹羽崇史)

瓦類 瓦磚類の出土はごく少数にとどまった。SD580・SD581からは、藤原宮期と推定される丸・平瓦が出土している。(高田貫太)

その他 遺構および包含層から、鉄釘1点、動物骨9袋分、石庖丁1点、加工木5箱分が出土した。動物骨と加工木の大半はSD580からの出土である。石庖丁はSK578出土(図88)。緑色凝灰岩製の完形品で、長さ10.2cm、最大幅4.0cm、厚さ0.8cm、重さ61g。2箇所(図88)の紐通し穴をもち、背と穴の上側には紐ずれの痕跡がある。刃部には若干の研ぎ減りが認められる。(豊島直博)

5 ま と め

今回の調査では横大路南側溝を想定位置で確認することができた。また、右京一条五坊西北坪内でも藤原宮期の建物等を検出し、坪内の状況を明らかにする手がかりを得ることができた。

横大路南側溝は、新旧の2条が存在する。SD580が藤原宮期の溝であり、SD581がそれより新しく奈良時代まで機能していたことが、遺構の重複関係と出土土器から明らかになった。横大路における2条の溝は初めての検出例となる。この地ではおそらく奈良時代初頭に入ってから側溝が付け替えられ、道路の幅員を狭めた可能性が高い。このことは、平城京遷都以降にも横大路を再整備して使用していたことを意味しており、遷都時に廃絶する一般的な条坊道路との違いがみてとれる。藤原宮期か

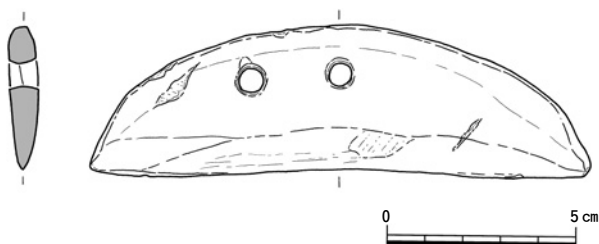


図88 SK578出土石庖丁 1:2

ら奈良時代にかけての横大路のあり方とその性格に重要な知見を加えたといえよう。

一方、1992年の橿原考古学研究所の調査で検出された横大路南側溝は1条のみであり、今回の調査における検出状況とは異なる。間に西五坊大路が想定されるため、溝が連続しなかった可能性も考えられる。

しかし、横大路とその側溝に関して、調査ごとに遺構の規模など検出状況が大きく異なっているのが現状である。詳細の解明には周辺の調査はもちろんであるが、遺構やその検出状況の詳しい比較、他の条坊遺構との比較など、さらなる検討が必要である。

また藤原京造営以前についても、石庖丁や弥生時代の土器が出土したことから、弥生時代からの生活の場であることが判明した。

今後の調査・研究により、横大路とその周辺の状況のさらなる解明が期待される。(番)

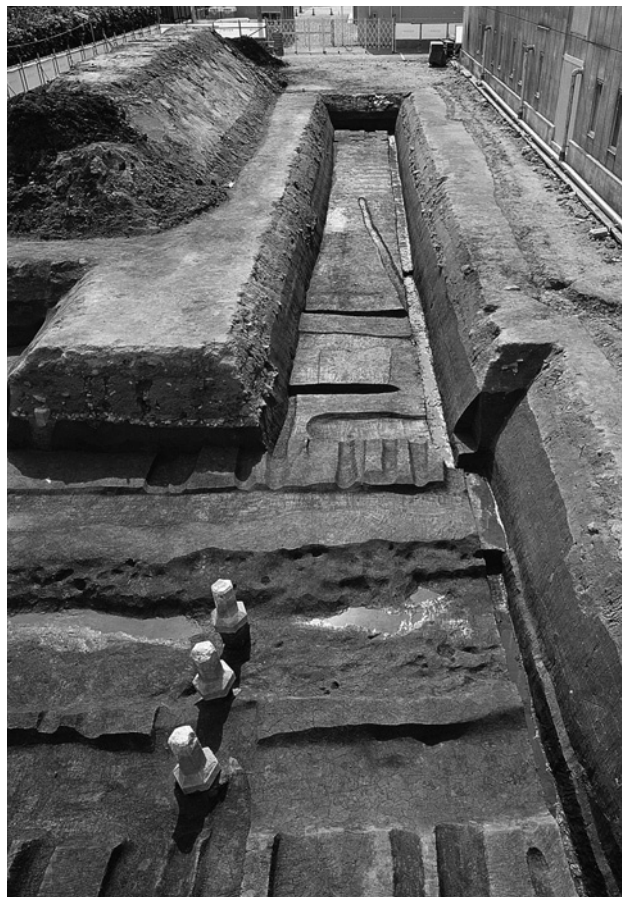


図89 調査区西部(北から)